

# NCJTA NEWSLETTER

## 北加日本語教師会

発行/編集 Northern California Japanese Teachers' Association

<http://www.ncjta.org/>

第25号・2006年 9月発行

### 北加日本語教師会 2006年の秋の例会

Saturday, November 11, 2006

UC Berkeley



#### 会長の挨拶

伝統的な日本文化・日本発の現在進行形カルチャー・日本語学習  
南 雅彦

北加日本語教師会 (NCJTA) 会員の皆様は、夏休みをどのようにお過ごしになりましたか。日本に帰省されて、新しいものに遭遇された方、そうした現在進行形カルチャーが素晴らしいと感じられた方、逆にそうしたものに何かしら違和感を覚えられた方もいらっしゃると思います。私は、7月7日サンフランシスコの日本国総領事公邸での山中総領事主催による三味線奏者松本梅征氏のサロン・コンサートに出席させていただきました。こちらは伝統的な日本文化の具現なのでしょうが、演奏された曲は和楽ばかりでなく洋楽もあり、津軽三味線、秋田三味線、そして尺八のパワフルな演奏と興味深いお話に圧倒されてしまいました。松本氏は海外での演奏活動を頻繁に行ない、また、小・中・高等学校で現地の子供達との交流を通して日本文化の紹介に貢献されています。渡米当初は海外在住の日本人・日系人は苦勞も多く、たいへんな生活を強いられていると思い込んでいらっしゃったそうです。しかし、実際にアメリカに演奏に来てみると、海外在住の日本人・日系人が元気に明るく頑張っているという現実から、逆に「元氣と勇氣」をもらったとのことでした。

私はサンフランシスコ州立大学 (SFSU) の大学院で、認知意味論・語用論・言語地理学・方言地理学などの言語学諸分野と文化人類学や異文化心理学を含む『社会言語学セミナー』を担当し、また言語心理学・応用言語

学・言語教育学などが中心の『第2言語習得セミナー』も教えています。こうしたセミナーで取り上げるトピックのひとつに『文化の再確認効果』があります。例えば、日本・中国・韓国・フィリピンなどからの移民集団がアメリカに持ち込み築き上げた文化の方が、それぞれの出身文化より集団的、伝統的だという異文化心理学の分野での報告があります。「移民のほうが伝統的である」という様相を理解するためには、移民がアメリカに到着した際に、その当時の自国文化と一緒に持ち込んだことに立ち返らなければなりません。移民集団は自分達が移民してきた際に持ち込んだ文化を結晶化するため、この心理的な文化が代々引き継がれて行くことになるのです。移民集団の人々の多くは、多様な文化的アイデンティティを持ちながら育つ一方で、多様な文化の中で自国文化本来のアイデンティティこそが尊敬するに値すると考え、もしくは、自らにそう思い込ませることこそが生き延びる術で、文化的伝統・遺産を大切にしようになると推測されます。つまり、多様な文化社会での生活の中で自らのアイデンティティを維持するため、自らの背景となっている文化の再確認を行なう必要があるのです。

私がSFSUで教えた学生でミドルネームが「オトジロウ」という人がいます。この「オトジロウ」という名前は、その学生にとっては祖父の代から引き継いでいる由緒ある名前だということですが、現代の日本でそういう名前を産まれた子供につける親は少ないのではないのでしょうか。つまり、移民は自らが持ち込んだ自国本来の文化が変わらないように次世代に引き継いでゆくわけですが、一方、自国の文化は時が進むにつれて変化します。その際たる例が現在進行形カルチャーです。よって、上述したように文化の価値観という点から移民集団と自国集団を比較すれば、本来の自国文化が変化しても、移民集団の結晶化した文化がさほど変化していないため、自国文化より移民文化の方が古い、もしくは本来のもの、極論すればステレオタイプとして概念化した文化に酷似して行くのです。

第2言語習得の分野で使用する用語に『化石化 (fossilization)』があります。これは「第2言語学習者の習得過程で、ある項目や事柄が誤用のまま修正されずに、いつまでも誤用として残る」状態を意味しています。アメリカにおける日系移民は19世紀末に始まり、西海岸を中心に各地で日本町を築いてきました。サンフランシスコにも日本町があり日本人、日系米国人が非常に多く住んでいます。今年2006年、サンフランシスコ日本町は百周年を迎えましたが、7月24日には記念事業の一貫として『日系人アイデンティティの変容』に関するシンポジウムが開催されました。シンポジウムを要約すると、収容後の日系人は日本との距離を強調することでアメリカへの忠誠を誓って市民権を主張したが、それにもかかわらず、日系人の文化が今なお明治時代に基づいており、シンポジウム発表者の表現をそのまま借りれば『化石化文化 (fossilized culture)』であるということでした。この場合の『化石化』という言葉は必ずしも否定的な意味合いを含んではいませんが、「誤用のまま修正されずに、いつまでも誤用として残る」という意味も確かにあるので、快く感じられない人もいらっしゃるかもしれません。実際、第2言語習得の分野でも、最近では『化石化』という用語を避け、『定着化 (stabilization)』という用語が使用されていますが、『化石化』という言葉が適切か不適切かという問題はさておき、ここにも「移民のほうが伝統的である」すなわち、伝統的な日本文化の結晶化を垣間見ることができます。

さて、今秋も様々なイベントが目白押しです。まず、10月29日(日)には、在サンフランシスコ日本国総領事館広報文化センターとの共催で、北カリフォルニア地区の小・中・高校、コミュニティーカレッジ、大学、日本語学園の日本語教師のための「文化をどう考え、どう教えるべきか」に関するワークショップを開催します。大学レベルの先生方からは、日本文化をどのように取り入れ日本語を教えていったら良いのかをトピックとしたワークショップ開催の要望をたびたび耳にします。また、高校レベルの先生方からはAPプログラムには日本文化に関する問題も出題されるからとか、日本文化を積極的に取り入れ日本語を教えていきたいからといった理由や動機で、やはりワークショップを行なって欲しいとの要望があります。今回のワークショップは日本語教師の先生方が日頃から持っていらっしゃるこうした要望にお応えするものですので、是非とも皆様でご参加ください。

ここで、今回のワークショップの背景についてももう少し詳しくご説明する必要があると思います。「文化」はアメリカの外国語教育のスタンダードでも真剣に取り扱われ始めていますが、世界中どの文化においても類似しているか同一である「文化普遍性」と、個別の文化にしか見ることのできない「文化固有性」の相異なる様相が併存しています。しかし異文化比較なしに、こうした文化的類似性や相違性の理解は不可能です。今回のワークショップでは文化の普遍性と個別性を明らかにしながら、文化をどのように捉え、どのように教えたらいのか、さらに、文化能力のテストが可能なのかどうか、ということに参加者の皆さんと共に考えたいと思います。今回

のワークショップの講師として、プリンストン大学教授の牧野成一先生をお迎えし開催する予定です。牧野先生は日本語教科書『なかま』の著者であり、ジャパン・タイムズから『日本語基本文法辞典』『日本語文法辞典【中級編】』も出版されています。また、日本語・日本文学学会 (Association of Teachers of Japanese) の会長も務められた著名な言語学者ですが、先生の今回のワークショップの演題は「同文化論のすすめ」です。私自身も参加しましたが、牧野先生は去る8月5日・6日にニューヨークで開催された日本語教育国際研究大会

(International Conference on Japanese Language Education: 略称ICJLE) の大会委員長も務められました。ICJLEでは日本文化・アニメ論に関しての基調講演がありましたし、文化やカリキュラムに関する発表もありましたので、そうしたことも牧野先生からお伺いできる機会もあるかと思えます。どうぞご期待ください。

さらに、11月11日(土)にはForeign Language Association of Northern California (略称FLANC) が UC Berkeley で開催されます。従来通り、NCJTA秋の例会はFLANCの午後のセッションの1つとして開催予定です。秋の例会のトピックは、先日8月27日にCollege Preparatory Schoolで行われた役員会で「アニメ、漫画、ファッションを取り入れた教え方」と決定しました。アニメ・漫画・ファッションというのは「伝統的な日本文化」に対峙するものとしての「日本発の現在進行形カルチャー」を代表するものです。最後に12月3日(日)は、習得した日本語の能力を客観的に測定しこれを公的に認定する制度である『日本語能力試験』がSFSUで実施されます。今秋も様々なイベントを通して、NCJTAのさらなる発展と活性化のために、メンバーの皆様方と一緒に勉強させていただきたいと思っています。どうかよろしくお願いいたします。



## 2006年 春の例会報告：

NCJTA春の例会は2006年日本語実用言語学国際大会(ICPLJ)の二日目の日曜日、3月5日12時より1時半までサンフランシスコ州立大学で開催されました。ICPLJの講師として講演されたウィスコンシン大学マディソン校のマグロイン花岡直美先生を迎え、先生の御著書「中級の日本語」の使用法や改訂版について活発な質疑応答がありました。その場で、副会長の候補としてカリフォルニア州立大学サクラメント校の増山和恵先生が推薦され、信任されました。

## 2006年 秋の役員会報告

(書記：榊原)

2006年8月27日 日曜日 12時

場所：The College Preparatory School

出席者10名：

南、今瀬、神原、クラーク、モールス、斎藤、榊原、島邊、田中、増山

## 議題

1. 秋の例会(FLANC)のトピックについて
2. 役員名簿の更新の件。任期は書記が補佐して会長が管理する。  
ウェブページが新しくなっている。
3. 日米タイムズの連載はできるだけ続ける。これは教育の現場とコミュニティのつながり、及びこの地域の日本語教育の記録を残すため。
3. 次回の日本語能力試験は12月3日、日曜日。
4. ニュースレターの発行の段取りについて話し合い。
5. ウェブページでのニュースレターの配信を始めたい。なるべくこの方法で送信するが、従来の郵送も続ける。
3. NCJTAを活性化させる為に現在の役員会をSenior Boardとし、Junior Boardを新設する。これはCSSFの大学院生と卒業生に仕事の間を与え、いずれSenior Boardのメンバーになるための若い人材を育てるため。(メンバーは、現在の所は高坂、浦山、今瀬)  
毎月会合を持ち、ニュースレターのウェブページ配信やウェブページの管理、春、秋のミーティングの企画に関する下準備などを行う。
7. Temple 大学の留学プログラムの広告を年間\$200で、ウェブページに掲載することを提案する。
3. FLANC代表はCLJTと隔年で担当するので、交渉する事。
9. 非営利団体としての寄付を受取できる資格は、今年の末までにとれる見込み。費用は\$740 ぐらい。



## 言葉の窓 第七回

### ロスト・イン・トランスレーション (Lost in Translation) と 日本文化

De Anza College/Mission College/UMUC  
シアース・多都美 (Tazumi Otsuka Scarce)

昔、小学六年生の国語の時間に先生から有名な芭蕉の句、「古池や蛙(かわず)飛びこむ水の音」を英語で表現しようとするなら「チャポン」という擬音語を付加しなければならないと聞いたことがありました。しかし擬音語を外国人に理解させるのは容易なことではありません。この句を読んだ日本人には「チャポン」という音が自然に聞こえてくると考えられるのですが、この句をそのまま英語にして英語母語話者が読んでも「チャポン」という音は聞こえてこないということです。その頃、英語と言えれば外来語として使っている単語しか知らなかった私は逆に「英語とは何と不便で不可解な言語だろうか」と不思議に思ったものですが、これはまさに”Lost in Translation”の例です。その後、英語を習うにつれ徐々に日本語と英語との本質的な違いに「何かが違うぞ」と気づき始めたのですが、米国で日本語を教えるようになってからは、これは真剣に考えなければならない問題になりました。数年前、母を亡くした後、高野山に

遺骨を納めに行く途中ケーブル・カーに乗っていた時のことです。観光案内の車内放送で「父母(ちちはは)のしきりに恋し雉子(きじ)の声」という芭蕉の句が流れた時、感傷的になっていた私は実際には聞こえない「ギャーギャー」という鳥の声が薄暗い林の中を突き抜けるように響きわたり胸がキリキリと痛むのを感じました。その時思ったことは、「さすが芭蕉！」そして、「これこそ日本語！」でした。日本語には英語への翻訳で失われてしまうリゾナンス効果があるのは確かです。

遊牧民族のパターンを基本として生まれた西洋語では、行く先々で見知らぬ人とコミュニケーションをするためにストレートで明解なレトリックを強調することが必須となりました。これに対して、米作りを中心とした農耕文化に根付いた日本人にとっては物事を西洋人の様にはっきりと述べることはそれほど重要な条件ではなかったようです。昔、日本人はたいてい同じ村に同じメンバーが長年定着して米作りを営んできましたが、一般的に平地は少なく、川は細く流れも激しく、特に灌漑作業は村全体のスケールで行なわれた共同大事業でした。草刈、田植え、稲刈りなども毎年同じサイクルで村人が協力し合っていました。死ぬも生きるも村人全員の働きしだい、天候しだい、米しだいだったのです。このコミュニティはまさに運命共同体でした。いわゆる「ツー・カー」の仲の人間関係です。そんな文化の中で育まれたのが日本語です。比較的語彙が少ないと言われる日本語の原型としての大和語ですが、語彙に乏しくても曖昧な表現がかえって多義的でメタファー的に機能し、また聞き手がそれを呑み込みお互い理解し合えるという独特のコミュニケーション・パターンに基づいています。英語が精巧なエラボレート・コード (elaborated code) で拘り定規的なデジタル型なら、日本語は謎めいたシークレット・コードで優雅なアナログ思考型だと言われます。この土壌には禅文化も花咲きました。禅では「真実」は言葉を超越するものであり、瞑想というサイレンスを経てのみ得られるものであり、サイレンスとは言葉が無効なのではなく、言葉と同等のものであると解釈されます。俳句などに見られるリゾナンス効果はまさにサイレンスが隠れた言葉を発信している例ではないでしょうか。また日本の自然環境もその文化を築いてきた大切な要素です。京都や奈良の古都の美しさは別格として、日本を訪れたことのある外国人の多くが日本の海岸や山々に見られる自然の美しさを称えています。大体、火山地帯には景勝地が多いのですが、四方を大海に囲まれ他国に支配されることなくその文化を洗練し、比較的穏やかなモンスーン気候により四季が顕著に訪れる自然環境を備えている国は世界でも珍しいと言えます。このような自然環境の中で生まれた日本文化は西洋文化のように果敢に自然に対抗するものではなく、自然を受け入れ自然と共存する文化です。そこでは天と地、海や川、植物、昆虫、鳥、動物達は日本人の生活に欠かせない主役もしくは脇役でした。

よく聞く例ですが、アメリカ人にとって虫の鳴き声はノイズとしてとらえられ、疎ましく感じられる傾向があるそうです。アメリカの歴史を考えてみましょう。十九

世紀に「マニフェスト・デスティニー」と名付けられたロマンティック・ナショナリズムを美徳に西へ西へと旅した開拓者達にとって、自然は彼らの前に立ちはだかるもの、征服しなければならぬ対象で、虫の音に憂い（うれい）を感じるゆとりはなかったのかも知れません。しかしながら、日本人にとって虫の音は愛でべきもので、古来日本文学には虫の音について語っている作品が多々あります。

「この野に虫ども放たせ給ひて、風すこし涼しくなり行く夕暮れに、渡り給ひつつ、虫の音を聞き給ふやうにて、げにこえこえ聞えたる中に鈴虫のふり出たるほどはなやかにをかし」（源氏物語）

「秋の野に道まどひぬ松虫の声するかたに宿や借らまし」（古今集 読み人知らず）

さて、芭蕉の俳句を例にして始めましたが、「古池や蛙飛びこむ水の音」に自然の息吹を感じ、生きとし生ける物への賞賛を惜しまない細やかな心とサイレンスの中に「チャポン」という音が存在する、そんな日本文化を米国における日本語教育で紹介することは日本語教師にとって興味深い挑戦であると思う毎日です。(9/24/06)

#### 参考文献

Bowers, C.A., (1989) *The cultural dimensions of educational computing: Understanding the non-neutrality of technology.*

Kindaichi, H. (1992). *Nihongo no tokushitsu.*

Ohno, S. (1994). *Nihongo no bumpo o kangaeru.*

Stewart E. & Bennett, M. (1991). *American cultural patterns: a cross-cultural perspective.*

Tsujioka, H. (1996). *Pragmatic competence: Making of requests by native speakers and second language learners of Japanese.*

[www.sing.co.jp/aki/uta.html](http://www.sing.co.jp/aki/uta.html)

[http://en.wikipedia.org/wiki/manifest\\_destiny](http://en.wikipedia.org/wiki/manifest_destiny)



## 2006年 Workshop / イベント

在サンフランシスコ日本国総領事館と共催で、北加地区日本語教師のためのセミナー・ワークショップ「文化をどう考え、どう教えるべきか」Workshop on “Future Directions for Culture Teaching and Learning”を開催いたします。スケジュール、出席の連絡などは領事館からのお知らせをご覧ください。

北カリフォルニア地区の小・中・高校、コミュニティカレッジ、大学、日本語学園の日本語教師のための「文化をどう考え、どう教えるべきか」に関するワークショップを開催します。大学レベルの先生方からは、日本文化をどのように取り入れ日本語を教えていったら良いのかをトピックとしたワークショップ開催の要望をたびたび耳にします。また、高校レベルの先生方からはAPプログラムには日本文化に関する問題も出題されるからとか、日本文化を積極的に取り入れ日本語を教えていき

たいからといった理由や動機で、やはりワークショップを行なって欲しいとの要望があります。今回のワークショップは日本語教師の先生方が日頃から持っていらっしゃるこうした要望にお応えするものです。今回のワークショップの講師として、プリンストン大学教授の牧野成一先生をお迎えする予定です。異文化という概念は、学問としても教育としてもずっとと言われてきていますが、文化の普遍性ということに焦点を合わせたらどうだろうか、というのが牧野先生の講演の骨子です。文化現象に属する言語現象の普遍性が言われて久しいわけですが、文化から言語を除いた残りの文化にも普遍性があり、文化は異文化と同文化の両面から見ていかなければならないのではないか、という考えについてお話しされます。牧野先生は日本語教科書『なかも』の著者であり、ジャパン・タイムズから『日本語基本文法辞典』『日本語文法辞典【中級編】』も出版されています。また、日本語・日本文学学会 (Association of Teachers of Japanese) の会長も務められた著名な言語学者で、去る8月5日・6日にニューヨークで開催された日本語教育国際研究大会 (International Conference on Japanese Language Education: 略称ICJLE) の大会委員長も務められました。牧野先生の講義、会場からの質疑応答も含め、各先生方がお持ちの「日本語クラスに日本文化をどのように組み込んでいったらよいのか」という課題に対し何らかの答えを見だし、今回のワークショップを通して得られた知識が今後の日本語カリキュラムに反映できるよう期待したいと思います。是非とも皆様でご参加ください。

- Foreign Language Association of Northern California (FLANC)
  - 日時: 11月11日 (土)
  - 場所: University of California, Berkeley (Dwinelle Hall)

Registration:	8:30 a.m. – 9:00 a.m.
1st Session:	9:30 a.m. – 9:50 a.m.
Welcome:	10:10 a.m. – 10:30 a.m.
Exhibition:	10:30 a.m. – 11:00 a.m.
2nd Session:	11:00 a.m. – 11:50 a.m.
Lunch/Exhibition:	11:50 a.m. – 1:00 p.m.
3rd Session:	1:00 p.m. – 1:50 p.m.
Exhibition:	1:50 p.m. – 2:00 p.m.
4th Session/NCJTA Meeting:	2:10 p.m. – 4:00 p.m.

日本語の発表としては、Wakae Kanbara先生と Yoko Hasegawa先生の「Designing Supplementary Grammar Courses for Intermediate Japanese」と Seiichiro Inaba先生の「Computerized Placement Tests-SPOT」があります。

従来通りNCJTA秋の例会は午後2時10分から4時までFLANCの一つのセッションとして行います。「アニメ、漫画、ファッションを取り入れた教え方」をトピックとして塩入クラークよう子先生 (California State University, East Bay) がパネル・ディスカッションを企画されています。クラーク先生の他、内田三養先生 (University of California, Davis)、アカシ・ヒデコ先

生 (Marin Academy High School)、宮本百合子先生 (University of California, Davis) がパネルの発表者として参加されます。どうか御期待ください。



## お知らせ

### 総領事館からのお知らせ

#### 1) 日本語教師セミナー

在サンフランシスコ日本国総領事館広報センター及び  
北加日本語教師会共催  
2006年10月29日(日)

在サンフランシスコ日本国総領事館文化広報センター及び  
北加日本語教師会共催による日本語教師セミナーを **10月29日(日)午後12時30分**より開催いたしますので、お知らせ申し上げます。

「ウチとソトの言語文化学」「日本語基本文法辞典」など数多くの日本語教育についての本の著者であるプリンストン大学の牧野成一教授を講師としてお招きし、今回は日本文化の捉え方、教授方法についてお話しをしていただきます。先生方の奮っての御参加をお待ちしております。

会場：サンフランシスコ日本国総領事館広報文化センター  
50 Fremont Street, Suite 2200 (22 F)  
San Francisco, CA 94105

\* 当館へのアクセス  
([http://www.sf.us.emb-japan.go.jp/en/e\\_m01\\_05.htm](http://www.sf.us.emb-japan.go.jp/en/e_m01_05.htm))

日程：午後12:30～ 受け付け  
1:00～2:00 出席者間意見交換会(学年別)：  
日本語指導における問題点  
2:15～3:45 講演：「同文化論のすすめ」  
牧野成一 プリンストン大学教授

“異文化ということは学問としても教育としてもずっと言われてきていますが、文化の普遍性ということに焦点を合わせたらどうだろうか、というのが私の講演の骨子です。文化現象に属する言語現象の普遍性が言われて久しいわけですが、文化から言語を除いた残りの文化も普遍性があり、文化は異文化と同文化の両面から見ていかなければならないのではないか、という考えについてお話ししたいと思います。”

3:50～4:50 質疑応答

ご出席の予約は10月25日までに高橋までご連絡くださいますようお願い致します。なお、先着順に予約を受け付け、満席になり次第打ち切らせていただきますのでご了承下さい。(TEL: 415-356-2461, Email: education@cgjsf.org) 入場料は無料です。

\*当日は夏時間終了日ですので、お時間を確認してご出席くださいますようお願い申し上げます。

#### 2) 第33回日本語弁論大会に関するお知らせ

北加日米会及び在サンフランシスコ日本国総領事館は、第33回日本語弁論大会を、11月5日(日)、同総領事館広報文化センター (Japan Information Center, Consulate General of Japan, 50 Fremont Street, Suite 2200, San Francisco, CA 94105) において開催することと致します。

本大会は、午前は中高校生の部、午後は大学・成人の部を開催する予定です。

#### 大学・成人の部

参加資格は、①18歳以上、②米国市民権及び永住権保持者、③6歳以後2年以上日本に継続滞在経験のない方が対象です。なお、過去に1等賞に入賞した方には出場資格がありません。入賞者には、賞金、及び上位3位にはトロフィーが授与されます。また、参加者の中から抽選で1名に日本航空より日本往復切符が授与されます。参加申込書ご希望の方は、北加日米会事務所 (415) 921-1782, ファックス (415) 931-1826, 内藤浄(415) 566-3792, naito@worldnet.att.net, 又は安田健彦(415) 409-0186までご連絡ください。(大学・成人部の出場申込書は同事務所で受け付けます。)

#### 中高生の部

参加資格は、6歳以後1年以上日本に継続滞在経験のない中高生が対象です。入賞者には、賞状、賞金及び賞品が授与されます(該当者がいる場合のみ表彰を行います)。なお、過去に1等賞に入賞した方には出場資格がありません。日本語を日常話している家庭からの参加者とそれ以外の参加者の2グループに分け、それぞれのグループでコンテストを行う予定です。大会では各学校による推薦(学校の推薦枠は代表1名、補欠候補1名)による参加申し込みを受け付けます。参加申込書ご希望の方は、当館(Tel:415-356-2461, Email:education@cgjsf.org)までご連絡ください。

(中高生出場申込書は同センターで受け付けます。)

#### 大学生・成人及び中高生参加者の申し込み締め切り

日は

10月20日(金)午後5時必着です。

#### 3) JET Program

The Japan Exchange & Teaching (JET) Program invites young college and university graduates from overseas to participate in international exchange and foreign language education throughout Japan as Assistant Language Teachers (ALTs) and Coordinators for International Relations (CIRs). The program is co-sponsored by the Ministry of Foreign Affairs; the Ministry of Education, Culture, Sports, Science & Technology; the Ministry of Public Management, Home Affairs, Posts and Telecommunications and local governments throughout Japan, in cooperation with the Council of Local Authorities for International

Relations (CLAIR). Begun in 1987 with fewer than 1,000 participants, the JET Program has grown tremendously. Today, the program is one of the world's largest international exchange programs, with over 5,500 participants taking part in the program this year from 44 different countries. Nearly half of these participants are from the United States. Participants are invited to Japan as representatives of their home countries, and play an important role in promoting mutual understanding between nations. Although no prior teaching experience and no prior Japanese language skills are necessary (for the ALT position), successful JET Program applicants must have a strong sense of responsibility, a genuine interest in learning about Japan, and must be able to adapt to a different culture and new situations. Applications for the 2007 JET Program will become available in early October 2006. To request information or to be placed on the application mailing list for the 2007 JET Program, please contact the Consulate General of Japan in San Francisco at [jet@cgjsf.org](mailto:jet@cgjsf.org) or (415) 356-2462.

## 日本語能力試験 (Japanese Language Proficiency Test) のお知らせ

国際交流基金 (Japan Foundation) では、日本語学習者を対象に日本語能力試験 (Japanese Language Proficiency Test) を1984年より日本国内だけでなく国外においても実施してきました。日本語能力試験は、習得した日本語の能力を客観的に測定し、これを公的に認定する制度です。西海岸では以前はロサンゼルスのみで日本語能力試験を受験しなければなりませんでした。3年前からサンフランシスコ・ベイエリアでも受験できるようになりました。ベイエリアでは、12月3日 (日) にサンフランシスコ州立大学 (SFSU) で今年度も引き続き日本語能力試験が実施されます。試験は、いちばん難易度の高いレベル1からいちばん難易度の低いレベル4まで4つのレベルに別れていますので、自分の能力に適したレベルを受験することができます。各レベルとも、「文字・語彙」「聴解」「読解・文法」の3つのセクションから成り立っています。受験費用は昨年より据置きでレベル1と2が50ドル、レベル3と4が40ドルになっています。受験手続は、オンラインでも、郵送でも可能ですが、郵送の場合は所定の願書に必要事項を記入し、ロサンゼルス (L.A.) の Japan Foundation, Language Center まで申し込んでください。なお、オンラインでも郵送でも詳細は <http://www.jflalc.org/?act=tpt&id=23> をごらんいただくか、電話 (213) 621-2267 (月-金 9:30-5:30)、もしくは E-mail: [noryoku@jflalc.org](mailto:noryoku@jflalc.org) までご連絡ください。受験願書の受付は10月6日までとなっています。日本語教育に携わっていらっしゃる先生方、継承言語としての日本語に興味をお持ちの皆さん、日本語能力試験に日本語学習者がふるって参加されるよう御推薦ください。  
(サンフランシスコ州立大学 南 雅彦)

## 北加日本語教師会2006年秋の例会のお知らせ

### Fall 2006 Conference:

新しい方、しばらくお休みの方を是非お誘いの上、いらして下さい。

11月11日(土曜)

場所: UC Berkeley 大学

詳しくは別紙の秋の例会の案内をご覧ください。



## 先生の紹介欄

### 増山和恵先生の紹介

1) お名前を教えてください。

増山和恵です。

2) 教えている学校名、町を教えてください。

カリフォルニア州立大学サクラメント校ですが、去年より、「サクラメント大学」も正式名称として使われるようになりました。

3) 日本語教師はいつから?

1990年にオレゴン大学の East Asian Languages and Literatures で TA をしたのが、一番最初の経験でした。その後、カリフォルニア大学デービスで講師、ニューヨーク州立大学バッファロー校で日本語プログラムのコーディネーター及び講師、メアリーツカモトカリフォルニア日本語教師養成プログラムの日本語スペシャリストとして日本語教育、日本語教員養成などに従事してきました。又、国際キリスト教大学のサマープログラムの上級レベルやバイリンガルの授業も持ちました。振り返ってみると、いろいろな学生と接してきましたね。

4) ご趣味は?

ヨガ、卓球、テニス、ハイキング、旅行等。一番好きところはやはりスイスアルプスとタンザニアのセレンゲティかな。

5) 日本の出身地は?

神奈川県の相模湖といういな。川、湖、山の中で育ちました。

6) アメリカに来てから何年ですか?

18年ぐらいですね。夏はほとんど日本に帰っているか、他の国にいますが、、、

7) 仕事について、なにか一言お願いします。

日本語教師というのは何年やっても楽しいですね。学生にいつも励まされています。Sac State は、とにかく教える学生数が多いので、コンピューター導入に力を入れています。又、サクラメント地域の日本語を教えて

いる先生方とよく集まって、笑って、ストレス解消しています。

8) 会員のみなさんへのメッセージがあればどうぞ。  
日本語教師は体力勝負。お互い健康に気をつけたいものですね。

## 田中理恵先生の紹介

1) お名前を教えてください。  
田中理恵と申します。

2) 教えている学校名、町を教えてください。  
Portola ValleyのWoodside Priory SchoolとPalo AltoのCastilleja SchoolとSFの桑港学園で教えています。

3) 日本語教師はいつから?  
2001年からです。

4) ご趣味は?  
学期中は時間に余裕がないのですが、時間がある時には縫い物、編み物、ゲーム、ドライブなどをします。あと最近、キャンプもするようになりました。

5) 日本の出身地は?  
岡山です。

6) アメリカに来てから何年ですか?  
1999年に来たので、今年で8年目です。

7) 仕事について、なにか一言お願いします。  
いい恩師、先輩、同僚に恵まれ、とても楽しく仕事をさせてもらっています。準備に時間がかかりますが、本当にやりがいのある、素晴らしい仕事だと思います。

8) 会員のみなさんへのメッセージがあればどうぞ。  
これからも北カリフォルニアの日本語教育を盛り上げていきましょう。

## 編集後記

新学期が始まり、会員の皆様、諸先生方には、お忙しい毎日をお過ごしのことと存じます。今回のニュースレターには新メンバーも加わり、より一層、日本語教育に関する話題を充実させました。今後とも、会員の皆様のご意見、ご投稿をスタッフ一同心からお待ちしております。どうかお気軽にご意見、ご質問、ご感想等を、南、田中もしくは今瀬までお送りください。

南：[mminami@sfsu.edu](mailto:mminami@sfsu.edu)

田中：[manami\\_t@ix.netcom.com](mailto:manami_t@ix.netcom.com)

今瀬：[hiroimase@yahoo.co.jp](mailto:hiroimase@yahoo.co.jp)



北加日本語教師会連絡先

NCJTA

## Officers

### <事務局>

<http://www.ncjta.org/>

NCJTA. c/o Masahiko Minami

Department of Foreign Languages

サンフランシスコ州立大学 San Francisco State

University

1600 Holloway Avenue

San Francisco, CA 94132

(415) 338-7451

<http://userwww.sfsu.edu/~mminami/>

### <役員>

会長： Masahiko Minami南雅彦 (同上)

副会長： Kazue Masuyama 増山和恵  
University of California, Sacramento

書記： Haruko Sakakibara 榊原晴子  
Dept. of East Asian Language and Literature,  
University of California, Davis  
Davis, CA, 95616-8560  
Tel:(530) 752-4129 FAX: (530)-752-8630  
E-mail: [hosakakibara@ucdavis.edu](mailto:hosakakibara@ucdavis.edu)

会計： Mayumi Saito 斎藤真由美  
2105 Saratoga Place, Davis, CA 95616  
E-mail: [msaito@ucdavis.edu](mailto:msaito@ucdavis.edu)

フランク連絡員/コミュニティーカレッジ代表兼任：  
Yoko Clark 芳子クラーク  
CSU Hayward  
Tel:(510) 885-3229  
E-mail: [yokosclark@yahoo.com](mailto:yokosclark@yahoo.com)

フランク連絡員/ニュースレター編集委員兼任：  
Manami Tanaka 田中真奈美  
Tel:(415) 387-2793  
E-mail: [manami\\_t@ix.netcom.com](mailto:manami_t@ix.netcom.com)

### <各レベル代表>

小学校：

Hiroko Imura 飯村弘子

Pacific Academy Nomura School

Tel:(510)528-1727

E-mail: [hiimura@pacificacademy.com](mailto:hiimura@pacificacademy.com)

中学校：

Hiroshi Imase 今瀬博

Odyssey School

Tel:(650)548-1500

E-mail: hitoimase@yahoo.co.jp

高校代表：

Atsuko Morse モールス厚子

The College Preparatory School

Tel:(510)652-0111

E-mail:ahmorse@aol.com

学園代表：

Mikiko Shimabe 島邊美紀子

San Jose Betsuin Lang.School

Tel:(408) 227-3371

E-mail:shimabe@attglobal.net

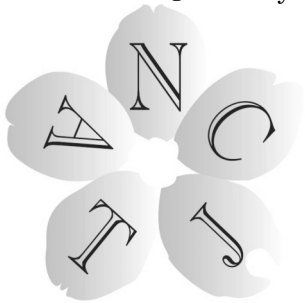
大学代表：

Wakae Kambara 神原若枝

UC Berkeley

(510) 652-0111

E-mail: wkambara@berkeley.edu



Northern California Japanese Teachers' Association